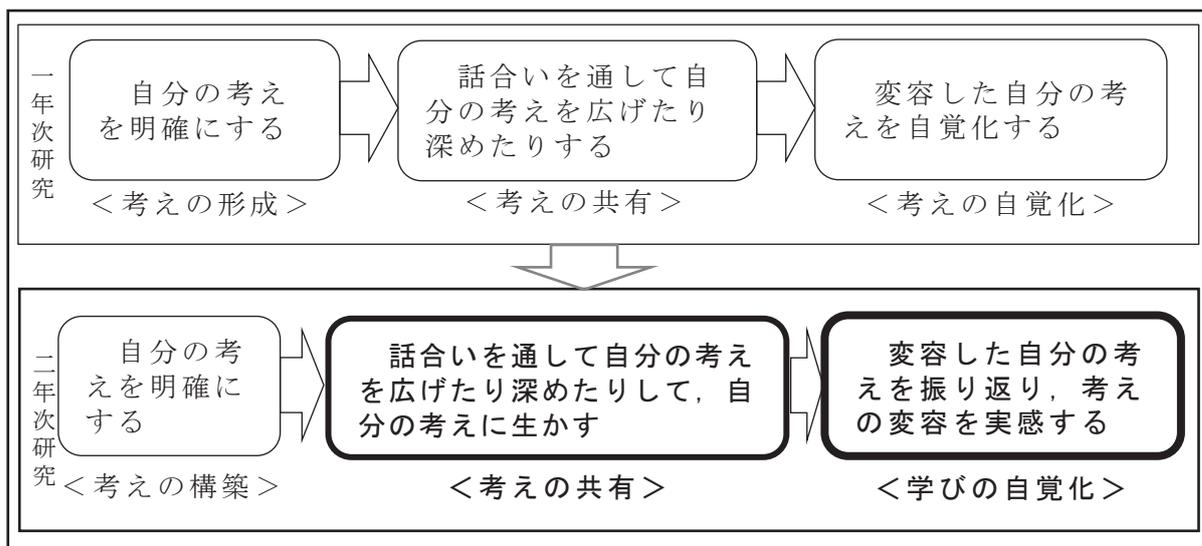


(2) 研究の視点

自分の考えを広げたり深めたりするためには、「互いに分かりやすく伝え合うための過程（一年次研究）」（資料5上段）を見直す必要があると考えた。そこで、＜考えの共有＞において話し合いを自分の考えに生かしながら、＜学びの自覚化＞へつなげることで、変容した自分の考えを振り返らせ、考えの変容を実感させるとともに、その中で、複式学級のよさを最大限生かしていくこととした。さらに、本校の課題との関連が深い＜考えの共有＞、＜学びの自覚化＞の二つの過程に重点を置くことにした。

【資料5 自分の考えを広げたり深めたりするための過程（令和2年度）】



複式学級のよさを最大限生かすためには、複式学習指導の進め方を見直す必要があると考えた。これまでのずらし（学年別に学習過程をずらして組み合わせる（資料6上段））では、学習状況に応じた教師の直接的な指導がより手厚くできるというよさがあったが、わたり（直接指導のために二つの学年をわたり歩く教師の動き）の回数が増え、授業が教師主導になりやすい。そこで、ずらしを可能な限り減らし、教師はファシリテーター（進行）、コーディネーター（調整）の役割を担い、より子供主体で学習を進められるようにした（資料6下段）。その結果、教師の個に応じた指導がより柔軟にできるようになり、子供が主体的に学習に関われるようになった。

【資料6 ずらしなしの学習過程と教師の動きのイメージ】

